介護保険第2号被保険者における認定者の特定疾病について

主な結果概要

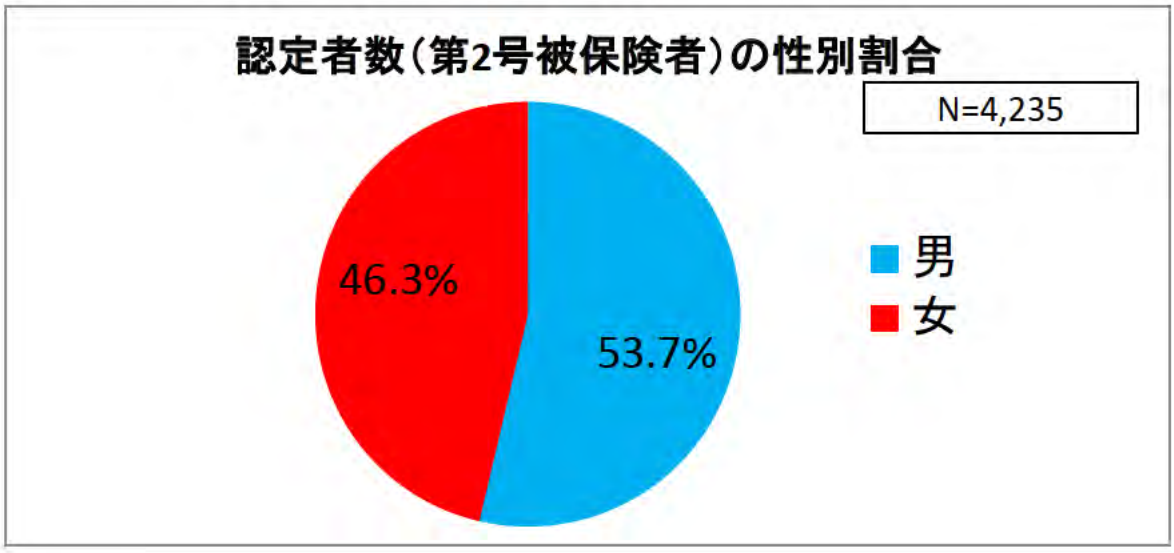
◆ 認定者数は男性が女性を上回っていました。
◆ 特定疾病で最も多かったのは「脳血管疾患」(45.0%)で、次に「末期ガン」 (18.1%)、「初老期における認知症」(9.0%)でした。この上位3疾患で、全体の72.1%を占めていました。
◆ 男女では、特定疾病の構成に有意な差があり、男性で多かったのは「脳血管疾患」と「糖尿病性神経障害、糖尿病性腎症及び糖尿病性網膜症」で、女性では、「骨折を伴う骨粗鬆症」、「関節リウマチ」、「両側の膝関節又は股関節に著しい変形を伴う変形性関節症」と「末期ガン」でした。
◆ 特定疾病の中で最も多い「脳血管疾患」の認定者数は、40歳代後半から徐々に増加していましたが、特に男性では50歳代後半から急激に増加していました。

※介護保険第2号被保険者における認定者の特定疾病とは
医療保険に加入している40歳～64歳までの人(第2号被保険者)が介護保険サービスを受けることが出来るのは、国の定める「特定疾病」が原因となって介護が必要であると認定された場合に限られます。
「特定疾病」は、「脳血管疾患」、「パーキンソン病」や「関節リウマチ」などの16の疾病です。

【結果を見るにあたっての注意点】
平成24年度に申請があり、認定された人の累計について集計しました。
そのため、年度内に複数回申請した人については重複して集計されています。
本来、平成24年度末現在の、重複がない第2号被保険者の特定疾病、性、年齢、居住区が分かるデータを解析するべきでしたが、データの入手が困難であったため、入手が容易な今回のデータを分析しました。参考にする際はこの点にご留意ください。

1 認定者数(H.24年度)

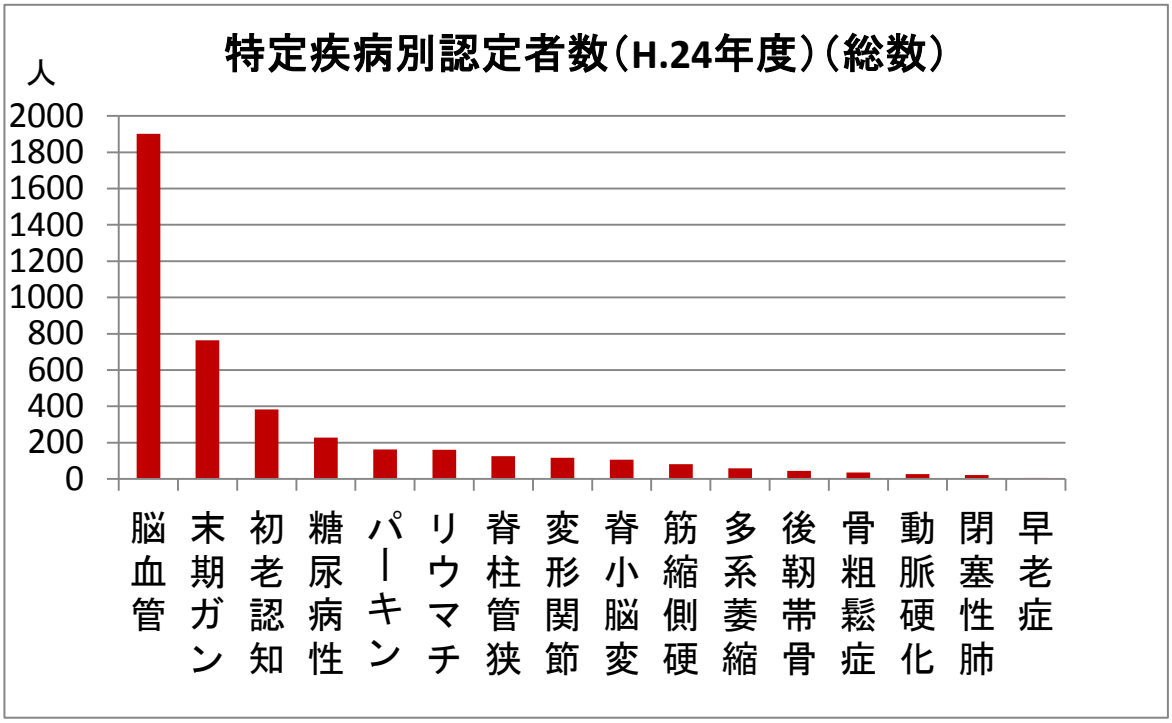
男性(53.7%)が女性(46.3%)を上回っていました。



2 特定疾病別認定者数（H.24年度）

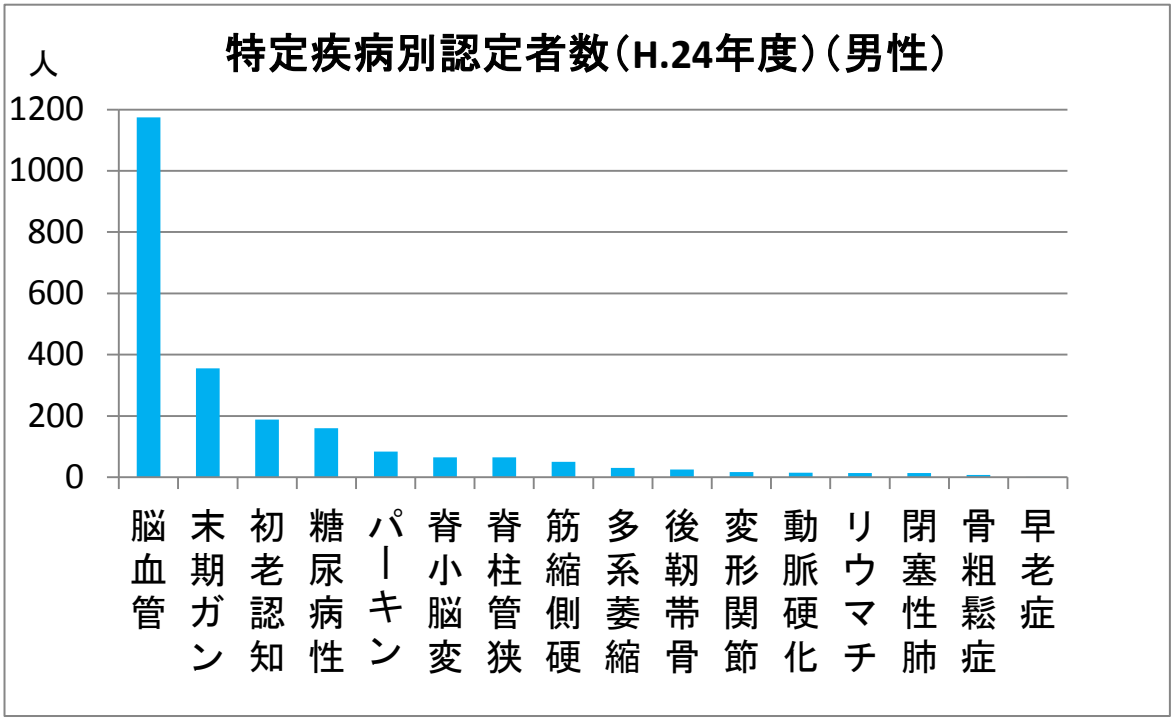
（1）特定疾病別認定者数（H.24年度）：総数

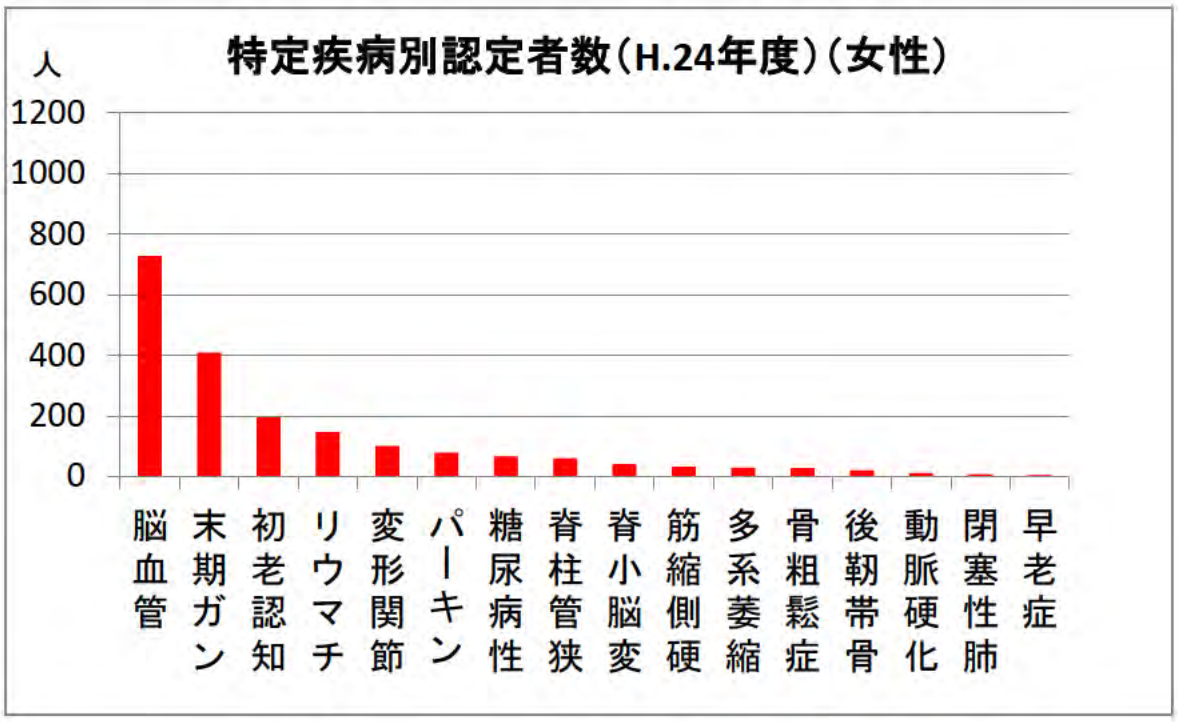
第2号被保険者が認定される原因となった「特定疾病」のうち、最も多かったのは「脳血管疾患」（45.0%）で、この疾患だけでほぼ半数を占めていました。次は「末期ガン」（18.1%）、「初老期における認知症」（9.0%）でした。この上位3疾患で全体の72.1%を占めていました。



（2）特定疾病別認定者数（H.24年度）（性別）

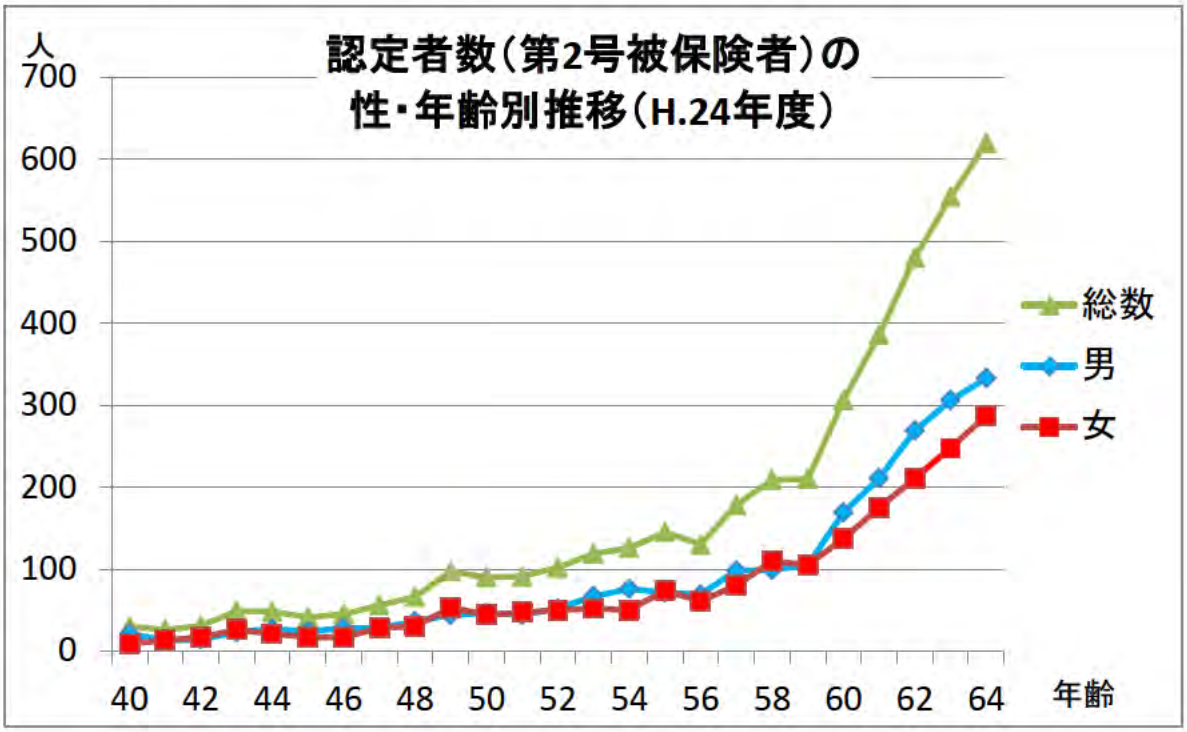
男女では、特定疾病の構成に有意な差があり、男性で多かったのは「脳血管疾患」と「糖尿病性神経障害、糖尿病性腎症及び糖尿病性網膜症」で、女性では、「骨折を伴う骨粗鬆症」、「関節リウマチ」、「両側の膝関節又は股関節に著しい変形を伴う変形性関節症」と「末期ガン」でした。





3 認定者数（第2号被保険者）の性・年齢別推移（H.24年度）

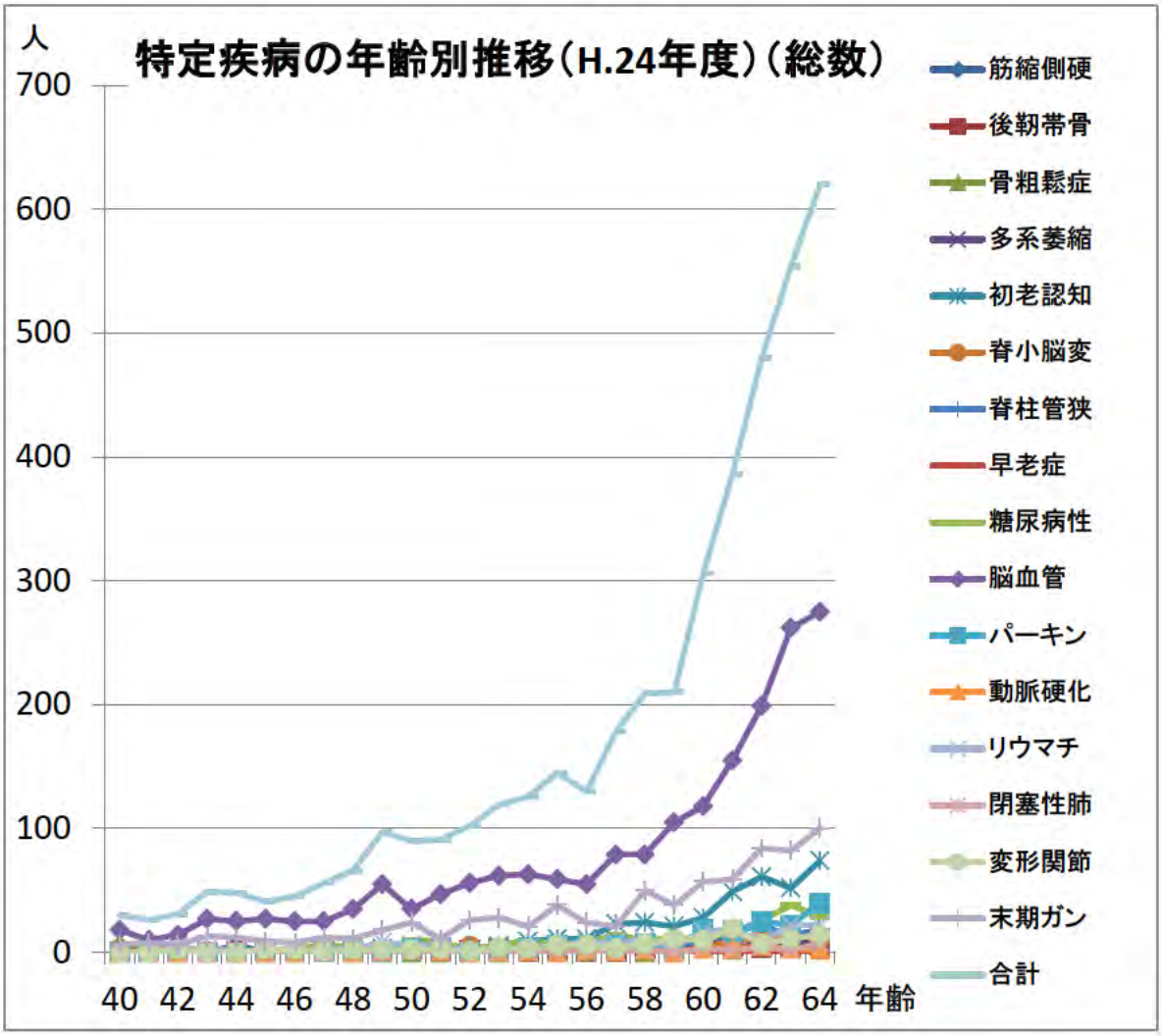
認定者数は、男女とも50歳代後半から急激に増加していました。
60歳代に入ると、特に男性の増加が激しく、女性を上回っていました。



4 特定疾病の年齢別推移（H.24年度）

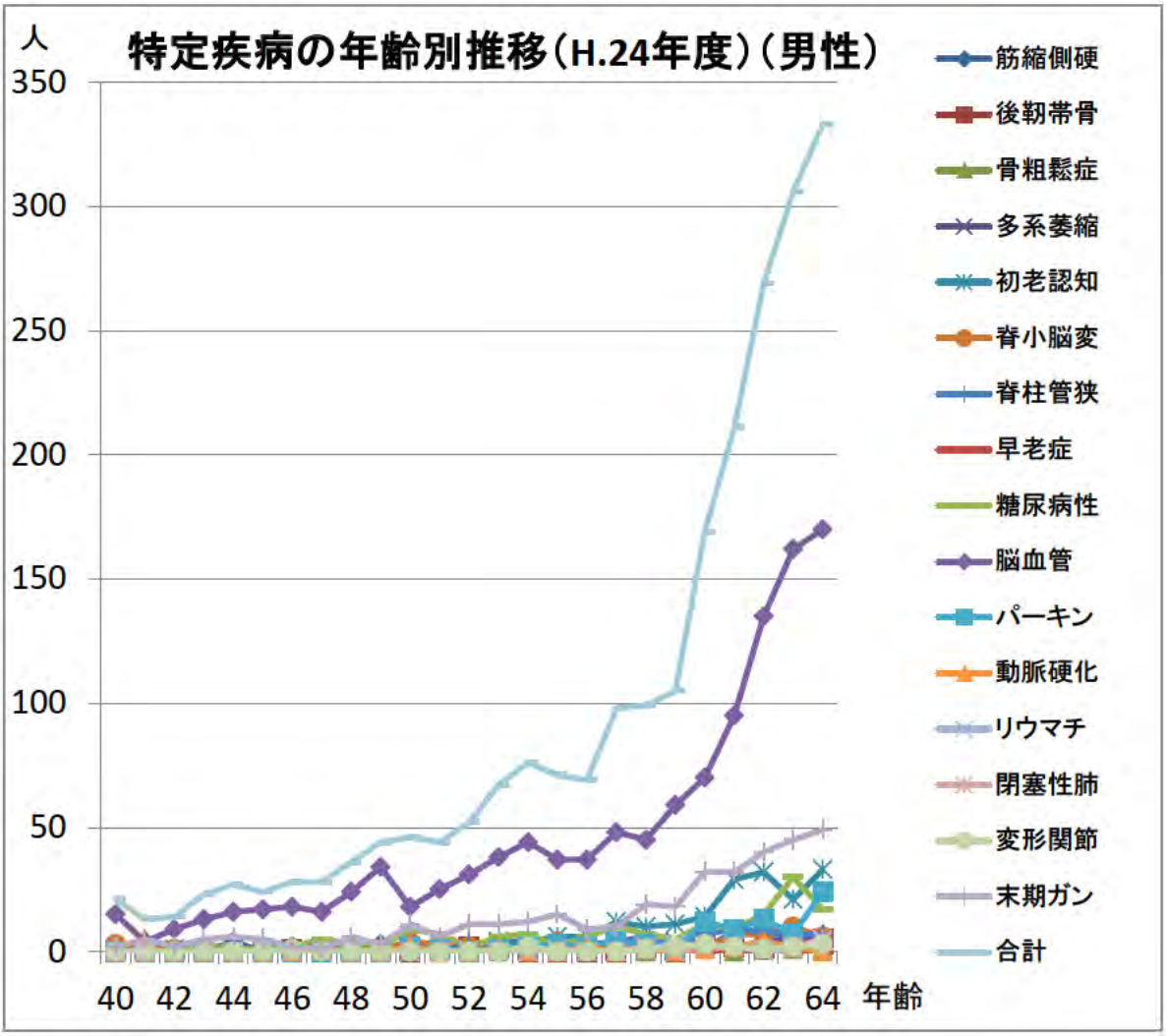
（1）特定疾病の年齢別推移（H.24年度）（総数）

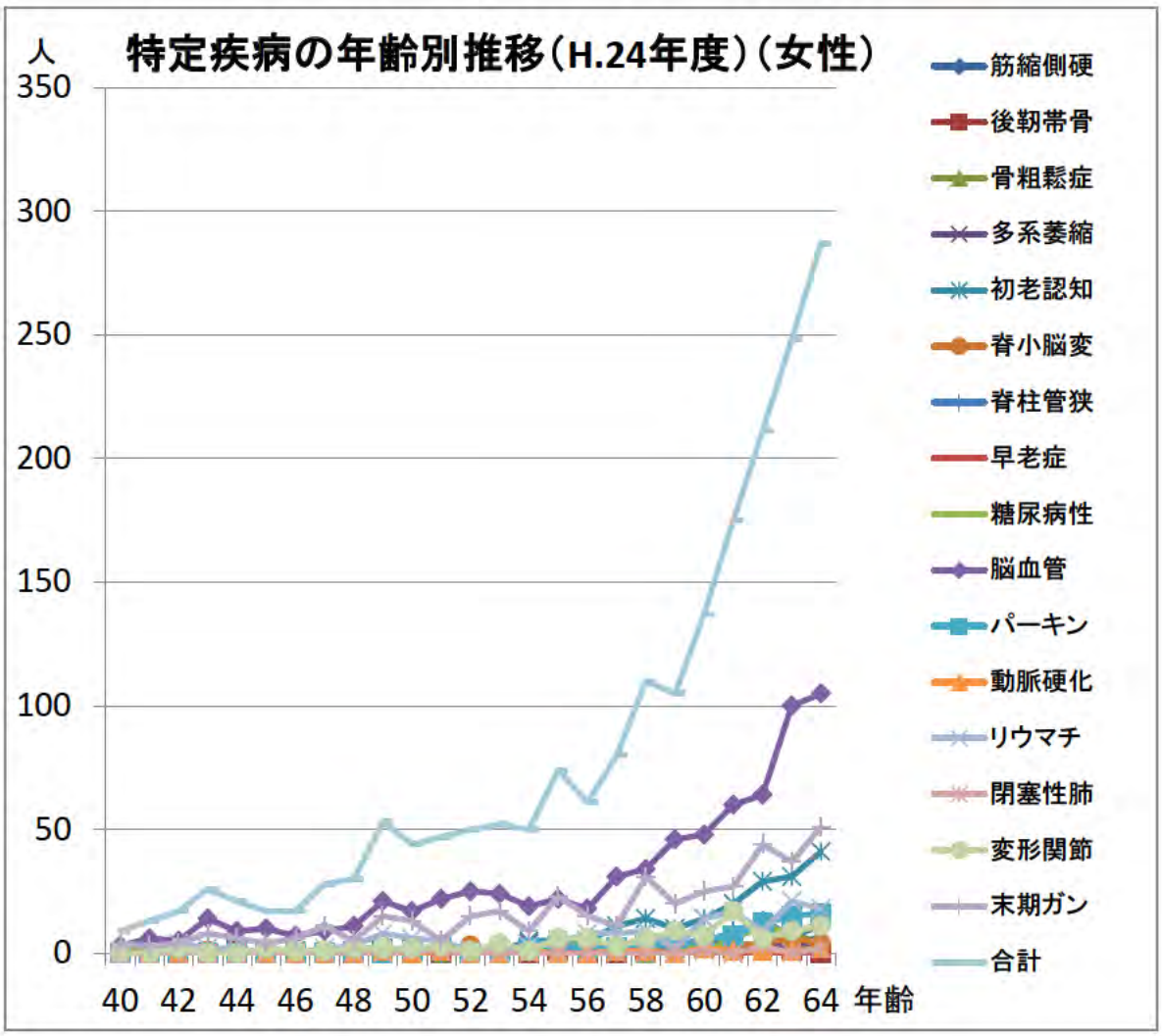
特定疾病の中で最も多い、「脳血管疾患」は、50歳代後半から急激に増加していました。
また、「末期ガン」や「初老期における認知症」も50歳代後半からさらに増加していました。



(2)特定疾病の年齢別推移(H.24年度)(性別)

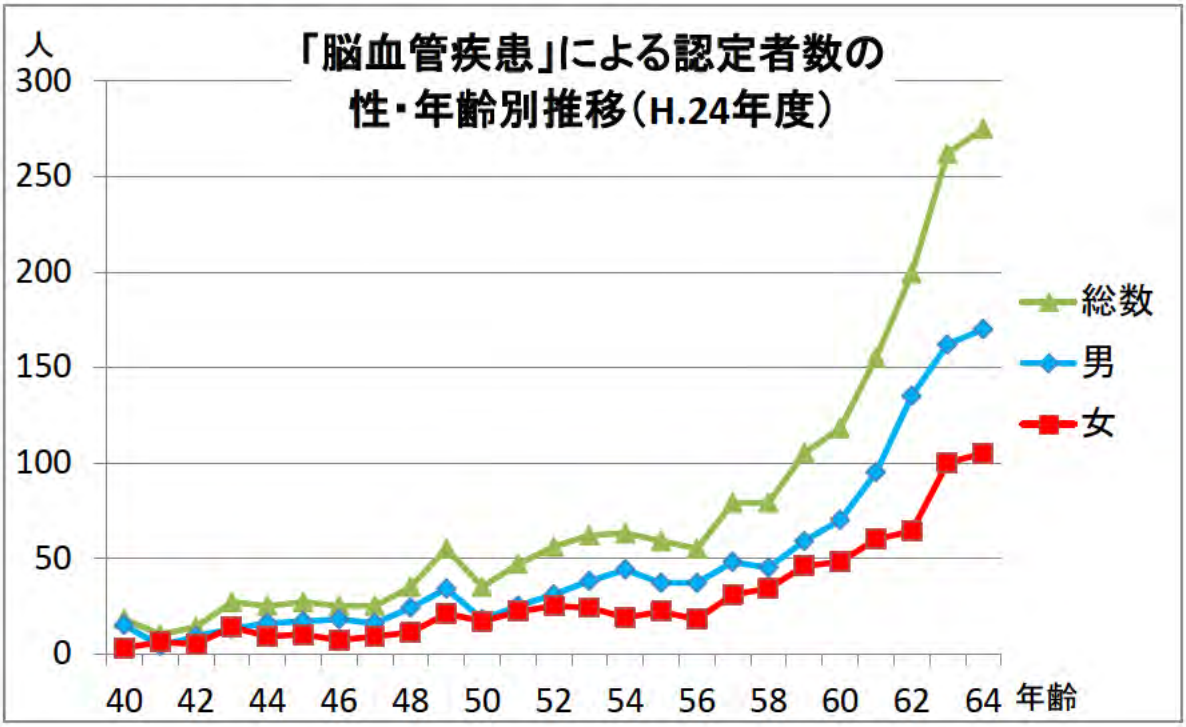
男女とも、50歳代後半から「脳血管疾患」、「末期ガン」や「初老期における認知症」が増加していましたが、さらに男性では60歳代になると「糖尿病性神経障害、糖尿病性腎症及び糖尿病性網膜症」や「パーキンソン病」も増加していました。女性では、60歳代になると、「関節リウマチ」や「両側の膝関節又は股関節に著しい変形を伴う変形性関節症」が増加していました。





再掲：「脳血管疾患」による認定者数の性・年齢別推移（H.24年度）

ほとんどの年齢で男性が女性を上回っていました。



○グラフ中の略称について

略称	正式名称
筋縮側硬	筋萎縮性側索硬化症
後靱帯骨	後縦靱帯骨化症
骨粗鬆症	骨折を伴う骨粗鬆症
多系萎縮	多系統萎縮症
初老認知	初老期における認知症
脊小脳変	脊髄小脳変性症
脊柱管狭	脊柱管狭窄性
早老性	早老性
糖尿病性	糖尿病性神経障害、糖尿病性腎症及び糖尿病性網膜症
脳血管	脳血管疾患
パーキン	パーキンソン病
動脈硬化	閉寒性動脈硬化症
リウマチ	関節リウマチ
閉塞性肺	慢性閉塞性肺疾患
変形関節	両側の膝関節又は股関節に著しい変形を伴う変形性関節症
末期ガン	ガン（末期）

○統計分析について

統計学的検定ではχ^2検定を行い、$p<0.05$をもって有意差ありとしました。
特定疾病別認定者数の性別の構成の違いでは、調整済み残差で判定しました。
分析ソフトはSPSS21.0を用いました。